
ゴールドラッシュ & ゴールデンエイジ

白金桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴールドラッシュ&ゴールデンエイジ

【ISBN】

N4877BA

【作者名】

白金桜花

【あらすじ】

ロボット+西部劇+世界大戦前夜な混沌とした世界。

そんな時代でアメリカの南北戦争が終わって数年後、まだその火がくすぶつてる中、

英雄ホリディ大佐の娘キャロルががんばって戦い抜く話です。

その1（前書き）

最初の最初、こつから最後まで製作日数2ヶ月で書き上げました。
今後ちまちま手直しを加えつつ投下したいと思つてます。

その1

自由と正義を賭けた南北戦争も既に終結して5年、アメリカも戦火から復興して、破壊された蒸気列車の車両網は徐々に修復されてきて、私たちの済むニューヨークも徴兵騒ぎとかあって昔は一人で散歩ができないぐらい危なかつたけど今はすっかもうり平和。

私の名前はキャロル・ホリディ、パパはあの北軍の英雄にして最強の蒸気仕掛けの5mの有人鉄巨人である蒸機鎧^{スチーム・アーマー}の使い手とされるジョン・ホリディ大佐、

私自信も民生品の蒸機鎧を用いたレース……チームレーサーの東海岸グランプリにて去年全国一位を取るぐらいの……ま、見事なまでの蒸機鎧乗りのサラブレッドって所ね。

そんな私が通うのはニューヨークのマンハッタンにあるアイアンハート高校、しつかしまあ本当にお嬢様高校つて名前じゃないわよね……

実際お嬢様学校じゃなくてごく普通、レベルも普通の学校だけど、これは単に、パパがたき上げで若い頃は士官学校で猛勉強して指揮官になつてそれで更に蒸機鎧を駆つて前線で英雄と言つべき活躍をした……

要するに努力の人だから華やかなお嬢様学校なんて見学したらその後に家で吐いてしまつてそして私にこいつ言ったのよ。

「あんな所に居たらキャロル、お前の性根も腐つてしまつ、高校はせめて普通の学校に行つてくれ」

真顔でそう言われた時は当然私は反発したわ、ママもちょっと文句の一つ一つ言つたけどパパは譲らない様子で学費はビタ一文出さない今まで言いだしたから仕方が無く、こんな普通の高校暮らしなのよね……ま、退屈じやないからいいけど。

そんな私は今日もいつも通り朝起きてゆっくり食事を食べて、そうちでいたらママに「もう行かないの?」って言われて時計を見て、いつも通り結構きつい時間だつたから慌てて茶色のブレザーとチーフのスカートが可愛い制服に着替えて顔を洗い、

鏡できちんと金色のウーブヘアに青いくりつとした瞳、そばかすがチャームポイントの眼鏡の美少女が居るのを確認して、それで家の庭にある蒸機バイクに乗る。

学校まで向かっている道には肌にあたる風が心地よく、ヘルメットが暑苦しいのを除けばバイク通学は悪くない。

バイクはまだ世の中に出たばかりで、一種のお金持ちのステータスみたいな所があるから珍しがるクラスメートはいいとしても、盗もうとする子まで来るのが困りものなのよね……ま、そんなのは私の自慢のアイキドーでぎつたんばつたんにねじ伏せたけど。

そうして私はすぐに学校にたどり着く。

「あ、キャロル姫今日も遅刻寸前?」

学校の自転車置き場にバイクを置くと、陽気な女の子の声が後ろから返ってくる。

声の主はリン・ファオン、チャイナって所からの移民みたいで黒い髪が凄い神秘的な雰囲気の子ね。

「ええ、何時もギリギリ、でもギリギリでも送れなきや問題ないでしぇう？」私はにっこり笑つて彼女の冗談を返す。

「あはは、さつすがお嬢様だ……大物だねえ」

「大物は私のパパよ？」リンにそう返し、私はすたすたと教室まで向かう、懐中時計を見ると、残り時間はあと5分、走ればいける、そう考えた私はすぐに校内に入る。

既に教室内に生徒たちは入っているのか、廊下に人の気配はない。

ヤバい、そう私は感じ全力で走り抜ける、行き先は1年のAクラス、ドンドンと足を進め、進め、進め、そして階段を駆け上がりその看板が見え、そこに入る扉の前を通り過ぎそうになり急停止、転びそうになるけどバランスを保ちそして扉をガツと開いて

その瞬間黒板消しがガツと目前に飛んできて、私の顔面にクリーンヒットし、体制を崩した私はそのまま倒れた。

「遅いぞお姫様！もう10分オーバーだ！」きつい男の声……私の担任、ジークベルグ先生の声が聞こえる。

10分オーバー、それが意味することはただ一つ。

セットしてあつた目覚まし懐中時計の時間が思いつきりズレていたということだった。

その2

「いのよしに、蒸機鎧というのは過去の文明で作られた蒸氣機械であり、現にイングランドの「ナイト・オブ・コルブラント」やイタリアの「セイント・オブ・アスカラント」など、古代文明により作られた蒸機鎧を改修し、軍事利用していたことは歴史を語る上で欠かせないでしょう」

歴史の先生が蒸機鎧乗りならだれでも知っているような話を続ける、「コルブラントやアスカラントなんて有名すぎてクラスの全員が知っているだらう」と私はあくびをしながら思つ。

「古代文明の蒸機鎧を改修したものを真作鎧、それらを解析し作ったものを贋作鎧と書いて、近年発達した蒸氣文明により大量生産が可能になりますよね、北軍を勝利に導いた「ウェスト・オブ・ピースメーカー」とか、あれも贋作鎧なんですよ」

そんな事誰でも知っている、それこそ異世界から来た人間でもなきやと思つてしまつ。

もつとこう、東洋の国ジパングの職人が真作鎧に負けじと魂を込めた「サムライ・オブ・マサムネ」や「スピリット・オブ・コテツ」等のワンオフ品の名贋作鎧とか、

「コルブラントと「デスペラード・オブ・ティルヴィング」の「ザイン」や機能の酷似性等の話題をしないのかしらと考えてしまうけど、結局高校じゃ無理よねと自己完結をしつつ、ノートに黒板の内容を書き写す。

そんな退屈な授業が終われば昼食の間に私は何時もの友達と一緒に学校外にあるレストランで食事を始めた。

あつたかい野菜たっぷりのフィッシュ・シューバーガーが私の好物、肉は苦手なのよね硬くて。

「でも、ナルとジントができるって本当?」 リンが一緒に来ていたアム・マクスウェルに問いかける、アムは学校の情報を収集するのが趣味で、ついた綽名が地獄耳、敵に回せば怖いが、味方に回せば頼りになる奴ね。

「んー、できるっていうかもう結婚秒読み? 卒業したら一緒にジパングに行くんじゃない?」

ジントというのはリンとは違つ、極東のジパングからの留学生、堅苦しいけど誠実な男つて感じで、軍人の家計みたいで成績も優秀、こんな学校になんで来たか謎なぐらいの優等生よ。

「ジパング……チャイナの方はイングランドの傘下だけど、植民地化を拒んで大反抗をしてるのよね……」 リンが色々ジパングに思う所があるのか複雑な顔を浮かべる。

ジパングはコーラシアの国家が連合を組み、イギリス主導で開国を求めようとした、ジパング政府を收めるトクガワ家はそれを?み、開国するかに思えた矢先、ジパングの各州でクーデターが発生、

電撃的に政府を奪い取り、コーラシア国家の駐留する飛空船団に蒸機鎧で襲撃をかけ撃破したというニュースはこのアメリカにも知れ渡った。

そのニュースによる衝撃的な内容は飛空船団の壊滅に蒸機鎧が使われた所、通常蒸機鎧は跳躍しても10mしか跳べない、カノン砲を持てば撃墜できるけど、このニュースでは写真つきではっきりと蒸機鎧が「飛んでいた」のが問題だったの。

飛行可能な蒸機鎧は真作鎧なら何個かある、だけど写真にははつきりと普通の賡作鎧とおぼしき機体がカタナと言われる刀剣で破壊しているところを捉えており、それはそう、ジパングの蒸機鎧技術がアメリカやコーラシアよりも進んでいるという事でもあった。

つまり、軍事力に関しては上と黙って良いほどの連中にコーラシアは喧嘩を売ったわけね、結果ジパング国内は沸き立ち、むしろ白人による支配解放を名目にフィリピンやアジア各国の白人企業に対し攻撃を始め、

解放した地域の人間と遺志の疎通を図り、大規模なアジア圏の武装勢力を築き上げ、今チャイナはコーラシアから来た白人たちの最期の砦と化しているつて話よ……ま、お父様曰く、植民地を圧迫しそぎた自業自得らしいけど。

実態は単に、ジパングの人間が白人になり代わってるだけなのだと私は思うわ。

アメリカはこの戦争に参加するように要請され、南軍はそれを支持していたが北軍は拒否、結果南軍にはコーラシアから大量の支援が來たけど、

それが仇となつて、またコーラシアに隸属する氣かと反発した南軍の人間が大量に裏切り、指揮系統が崩れた所を叩かれ南軍は潤沢な補給があるにもかかわらず劣勢になり、南北戦争は終結した。

当然、「圧勝つてわけにもいかず戦費を使いすぎた私達北側はそれを口実に参戦拒否、噂だけアメリカの自由と尊厳を守る精神に乘つ取り、ジパングに大量の軍事支援をしてる話まであるわ……パパに聞いたら鼻で笑われた、その程度の話だけど。

「さながらアジア大戦ね……」私はこの状況を形容するに相応しいと思つた言葉を言つ。

「ま、アメリカは中立つて言つてんだじジントもスパイで捕まつてない、別によくな？」そうアムはあつさりした感じで言つ、確かにどうでもいい、外国同士の戦いでアメリカは参戦する気は無いから。

私が興味あるとしたら、ジパング製の蒸機鎧に凄い乗つてみたいというだけ、それも名贋作と言わたるものに、真作鎧に匹敵するスペックを持つという贋作鎧、それが300年前から既にあったと言われる話、私みたいな蒸機鎧大好きっ子にはたまらない話題ね。

だから私はこう思う、ぶっちゃけジパングと同盟組んでジパングの蒸機鎧をひとつと輸入してほしいと。

そうすればパパが試し乗りに買つてきたのを乗れて、このニューヨークの空を飛んで回れるかもしないからだ。

その3

午後の授業は体育が2時間連続、体育は得意な私は男子顔負けの成績をドンドン出し、

それが終わったら私はバイクで帰宅しようと、バイクにキーをかけようとすると。

「あ、キヤロルー」そんな矢先にアムが私の方に駆け寄ってくる音が聞こえた。

「何?」私はアムの方を向くと、後ろにはリンも居た。

「ん、買い物行かない?新しいグッズ店見つけたのよ」「ひとつ笑いながらアムは言つ。

「新しいお店ね……いいわね、行きましょう~」別に帰つてもやる事なんて本を読むぐらいだし、

今日は蒸機鎧の訓練の日じゃない、要するに暇な日だった私はアムの誘いに乗る。

「うんうん、持つべきものは友達よねえ」リンが納得した様子を浮かべる。

「……生憎だけど、私は何も買ってあげないわよ」うん、こういう時のリンの態度はわかりやすい、

何か奢つてもうつもつだと察した私は、釘を刺す。

「う、ケチー……」むーっと膨れるロンを気にせず、私はバイクのエンジンを切った。

街中にバイクなんて置いたら一瞬で盗まれるからである。

そうして私達は、ニューヨークの繁華街に向け足を進めた。

繁華街はいつもいろんな人が居る、多種多様な移民で構成されるアメリカ、

それも南部の奴隸解放運動の後は黒人やアメリカの原住民であるインディアンも町でちらほら見かけるようになつた、

私はどうでもいいけどテレビじゃそれに対する反感を持った、元南軍の人間が犯罪を行つている話をよく聞くのは憂鬱ね。

⋮

⋮

⋮

「うー、バイクで行けばよかつたわね」かれこれ繁華街を一時間ぐらい歩いている気がする私は、いい加減バイクに乗つていけばよかつたと後悔する、

どうせ鍵を壊せる人間なんて居ないし、蒸機鎧を使って盗もうものならすぐバレるからだ。

「あはは、キャロルのバイクなら荷物持ちもできるしね?」リンが笑つて返す。

「そうね、でもそれにしても一体いつつくの?」

「あー、ヒツから路地裏に曲がるわけよ」

「路地裏?」アムの言葉に嫌な予感がする、路地裏は治安がかなり悪く、スラム化している場所もそれなりに聞くからだ。

「大丈夫大丈夫、スラム化してる場所は通らないって」アムは私が心配したのを察したのか、笑つて返す。

本当に大丈夫なのだろうか、そう思いつつも私達はアムの案内通り、路地裏に足を進める。

路地裏は薄暗く、一コ一コ一軒の高層ビルの間にありまだ口は登つているというのにまるで夜のように不気味だった。

「本当に大丈夫なの?」私は再度、アムに聞く、いくらなんでも雰囲気が悪すぎだと。

「大丈夫だって、キャロルってホント、そういう所はお嬢様なんだねえ」にやにやとアムは笑う。

確かにホリディ家は戦争の英雄で私の家はお金持ち、良く言えばアメリカンドリームの体現者、悪く言えば成金、まあアムにとつてはどうちでもどうでもよく、私はお金持ちのお嬢様なんだけど。

「リンも言ってあげてよ……」前を進むリンに私は声をかける、流

石に嫌な予感がする、アイキドーは確かに優れた武術だけど、体格差がある相手と闘うのはそれでも危険だ。

「心配しすぎだって、大体アイキドーがあるなら大丈夫でしょう？」
ダメだこれは、そう私は実感した、こつなれば毒も食らわば皿まで、
そう考え、周囲を見回し警戒する。

見回すと後ろに一人、堀の深いラテン系の、小太りの体格のいい中年男性が居た、男はコートを着込んでおり、葉巻に火をつけ、私と目をあわせたがすぐに目を逸らした。

それ以外に特に人の気配は無く、達は私は路地裏の奥に置くにと進んで行く。

進んで行く途中、空が何かに覆われたのか更に暗くなり上を見上げたら、そこには巨大な8つの可動式ジャイロを側面に搭載した飛空艇が飛んでいた。

「凄い低空飛行だねえ、キャロル、何処のか知ってる?」リンは私に聞いてくる。

「私の専門は蒸機鎧よ、だからこの飛空艇かは解らないわ?」正直に私は返す、と言つか、何で私が飛空艇について知っているつて思つたのか謎だ、

ひょつとして私つて格闘技大好きの軍事オタクのように見られているのかしらと思つてしまふ。

飛空艇が通り過ぎたのを確認すると、後ろからガサツと言つ物音が聞こえた。

咄嗟に後ろを向く。

さつきの、小太りのトレンチコートの中年男性が居た。

彼はゴミ袋に足をぶつけ、私の視線に気づくと顔を逸らし、今度は変な板みたいなものを触つていた。

尾行している？ そう私の直感が告げる、だが、何が目的かはわからなかつた。

「ねえ、リン、アム……」私は2人に声をかける、尾行されているとしたら人さらいかかもしれない、そうなつたら最悪……うん、凄い考えるのも嫌な事態になつちゃう。

「何？ 宇宙人でも見たの？」リンだ。

「ち、違つわ、後ろの男の人……その……さつきから私をつけてるみたい」

「……あのおじさんが？」リンは特に怖気づかず、後ろに居る男に指差す、男は特に動じることなく、またあさつての方向を向き葉巻を吸つっていた。

「うん、何かわからないけど人さらいかかもしれないわ」

「ホント、怖がりねえ……じゃ、いつしそうか」アムも危機感の無い、あきれた様子で語る。

私も少しその態度には怒りたくなつたけど、ここで怒つても意味

がないので、怒りを堪える。

「全力であたしが走るから、リンとキャロルはついてきてよ……
はい！3、2、1、スタート！」そうにこにこと笑みを浮かべた後、
走り始める。

「ま、待つてよーー！」リンもそれを追っかける形になる。

「ああもう一ちょっと！」置いてけぼりになつたらまずい、私もそ
れに続け2人を追いかけるために走り始めた。

その4

「はあ……はあ……はあ……ついたよ」

アムが体力を使いすぎたのか走り終えると、激しく呼吸を行い続ける、

「うう、へとへと……何でキャロルちゃんそんなにバテてないの」
リンもけろりとしている私に、疑問の言葉を出す。

私としてはあんまり体力を使つた訳ではないけど、リンもアムもかなり疲れているみたいに見えた。

「鍛え方が違うのよ、鍛え方がね？」私はそう笑顔で言つた後周囲を見回し尾行が居ないことを確認し、

安心するとその後目的地のお店と思わしき看板を見る、ファンシーできれいな装飾がされた、ポップなオカルト系グッズショップだった。

›イドリス魔法雑貨店くそう看板には書かれており、イドリスという人が店長なのかなと考える。

「とりあえずついたし、店長のお茶でも飲もうよ……」 うう、へとへとのアムは体を動かし、お店の扉を開けて入る。

私もそれについて行くように、お店の中に入った。

お店の中は煌びやかなオイルランプが天井に吊るされており、さま

ざまといつか雑多で「」ひた煮な、

どつかの部族のお面が売つてあると思ったらチャイナ系の壺が置いてあつたり、かと思つたらジパンングの刀置いてあつたりと統一性はないけど、何処か居心地のいい場所だった。

そしてその奥に何個かの円形のテーブルが置いてあり、そこに店長と思わしき人が居た。

「あら、『しきげんよ』」それはアラブ系の褐色の肌、金色の美しい髪の、20歳ぐらいの女性だった、

尖つた長い耳がまるでファンタジー小説の住人のような神秘的な感じのする人、そう私は感じたわ。

「すみません、休ませて~」アムはふらふらと奥の椅子に腰をかける。

すると店長は奥からティーカップを持ってきて、すぐにお茶を入れてアムに渡したわ。

アムは「」とお茶を飲み、リンもそれにつられてアムの向かいの席に座ると、店長は同じくお茶を差し出した。

「貴方はいいの? キヤロル・ホリディさん」店長は私の名前を言い当てた、ドキつとした気分に私はなる。

「な、何で名前を?」

「そうね、これでも魔女だからかしら?」手品師や魔術師というの

を私は全く信じなかつたけど、いきなり名前を当てたといつのは流石に驚く、

けど、アムの知り合いならアムが私の名前を言つたのかなと私はすぐにつつて、これ以上の詮索は怖いからやめようつて結論づけたわ。店長さんはすぐにお茶の入つたティーカップを私に近づいて渡す、ティーカップは冷えていて、どこかの異国のお茶なのかと私は思つた。

「水出しの麦茶よ、ジパングの商品なの」

「このお店、ジパングのものが多いですね」

「そうね……私の恋人もジパングの人だつたから、かしら」店長さんがそう言つ顔は、どこか寂しげであつた、恋人と別れたのかな?と私は結論づけ、詮索はよそうと決めた。

私も椅子に座り、お茶を飲む、冷えていい氣分になるお茶だつた。

「それで貴方は、どんな魔法がお望みかしら?」向かいに座つた店長さんが私に聞く、

魔法、と言われても私はそんな利益に縋るような立場では今は無いといつのに。

「そうですね……うーん……」

「……貴方は今日が運命の日になる、その決断で貴方は死ぬかもし

れない、生き残るかもしれない、死ぬよりも酷い業を背負つのかも
しない、

けど、死を望まないで、前に生きたいのなら少しの手助けをするこ
とは出来るわ」やつ、店長さんは真剣な顔で言つた。

「うして近づいて見ると、店長さんの顔は私と同じぐりこにあぢけ
なく、金色のロングヘアがどこか大人びた雰囲気を出しているだ
けだと気がつく。

けど、私と同じ年ぐらいの筈なのに、どこかその言葉には重みみた
いのが感じられて、本当にこの日が運命の日なのかと思えてくる。

「……10ドル、10ドルで一つだけ、貴方が欲しいものを売つて
あげるわ」そう店長は言つ。

そこまで卖れていないのだらうかと私は考えるけど、それにしては
妙に煌びやかで余裕が感じられ、そういう訳ではないことを認識す
る。

そして私は椅子から立ち上がり、店の中を物色する。

店には様々なものが並んでいた。

蒸気仕掛けの小型自動舞踏人形。

琥珀色の望遠鏡。

ダマスカスのような模様の出した、切つ先があまりにも鋭すぎて恐
怖すら感じる、神秘の短剣という札が貼られガラス箱のなかに動か

しても刃がどこにも当たらないように皮で拘束された短剣。

真理計という札が貼られたよくわからない黄金の羅針盤のようなもの、様々なよくわからない、けど神秘的なものがあった。

でも私が欲しいものとは違い、私は何かを求めていた。

何かはわからない、けど探して、様々な所を見て、そして、一つの赤い箱を見つけた。

これだ、これに違いない、そう、私は直観的にその箱が必要とするものだと感じていた。

赤い箱を開く、その中には銀色の、ガラスか何かで覆われたプレートのようなものと、一枚の写真があつた。

「……えっと、これって？」色のついた写真というだけでも驚いたけど、その写真は既にぼろぼろになっていたということ、つまり何十年も前のものだと言う事に、常識外の何かを感じた。

「魔法の板よ、その写真の彼が使っていたの」そう、店長さんは言った、開けてはならないものだったのかと私は考え、すぐに箱の中の中身を入れて閉じた。

「うーんめんなさい！」私はぺこりと頭を下げ謝る。恋人の形見は

危ない、ほんとうに危ない、いくら偶然でも、プライベートなものまで開けちゃった事に罪悪感が湧く。

「……ここのよ、写真はダメだけど、そのプレートと箱は貴方が持つていきなさい、既にそれは目的の終えたもの……彼ね、旅に出たのよ。彼は罪を背負つていて、それを清算するために戦おうと考えたのよね……私にはもう、何も縛られなくていいなんて言つておいて、彼は自分の罪に縛られ、清算しようとして戦いの旅に出たわ……でも、何年経つても帰つてこない、それも当然だけど、私はこうして待つていいの」

「そんな物なのこ……いいんですか？」

「ええ、10ドル払えば構わないわ、それが貴方の運命の鍵なら、私はそれを渡すだけ、彼が私と同じ状況に遭つても、きっと、渡していた筈よ」店長さんはそう言つけど、重たい品物だつた、けど、運命のカギと言つ言葉、そしてこの箱を見つけた時、これだと思つた。

私は学生鞄から財布を取り出し、10ドルを渡す、10ドルを受け取ると店長さんは箱から写真を撮り出し、私に渡した。

「貴方の運命に幸運と、ハッピーハンドがあらんことを」やつ、店長さんは受け取つた私に言つた。

その5

その後は店長さんと、リンとアムと4人で多少の世間話をして店から出て行った。

「それで、店長さんに何貰ったの？」リンは私に聞いてくる、私はそう言わると、箱を取り出した。

「うーん、こんなものね」

「箱？」アムがその箱を見て言つてくる。

「ええ、それにこれ」さう言しながら私は箱からプレートを取り出す。

「プレート、ねえ」アムはじろじろとのプレートに近づいて観察をしたが、すぐに飽きて首をひっこめる。

「よくわからないけど、何かお守りみたいなものみたい」さういえば勢いで推されたけど、結局これが何なのかはわからない、

それぐらいは店長さんに聞いておくべきだったと少し後悔しながら、プレートを観察する。

よく見ると中にある金属部分に細かい何かが刻まれていて、それでいて金属部分は何層にも重ねられている、

また外側の覆つてゐる透明なものはガラスよりも触った温度は高く、傷ひとつ無かった。

プラスチックにしては妙に硬さがあつて、そして重さがある、やつぱり何かのお守りなのかしら?

少し考えたけど結論は出なく、私はすぐにプレートを懐のポケットにします。

「うむむ、いつたいどこの文明なんだろ……真作鎧のあつた文明の品だつたりして」リンの言葉で、確かにその時代のものの可能性はあるなどという考えが出てきた。

写真にしても真作鎧があつた文明なら、あんな鮮明な写真が作れるだろうし、プレートにしたつて真作鎧のどこかの部品の可能性だつてある。

店長さんの恋人も、きっとジパング系の人で今戦場に居るだけ。

でも、だとしたら何であそこまで大切に保管されていたみたいなのに、ボロボロになつていたんだろう……私がそう考えていたその時だつた。

ドンッ、そう、前に居たアムが誰かとぶつかつた。

「あいたたた、す、すみま……」私も、アムも、リンも絶句していた、ぶつかつたのはいかにもなサングラス姿の紫のスーツを着たマフィアの男、

そしてその左右にはガラの悪そうな男が2人居た。

「……あ、アム? ここつてこいついう人居ない筈じや」「リンが怯

えた顔でそう言おうとした次の瞬間。右側に居た男がオートマチック銃を取り出し、銃声が鳴った。

「え……あ、ぎああああああ！」弾丸はリンの足に当たり、激痛にのた打ち回る。

私の頭の中では恐怖が支配され、言葉が出ない、出たら殺されると本能が告げ、腰が抜けへたり込む。

「つるせえシナ女だ……」右側の男はまるで、リンを「///」のような目で見て、もう一発拳銃を撃とつと、彼女に向ける。

だがその銃口はリーダーと思わしき紫のスーツの男の手に遮られた。

「親分？ 相手は麻薬欲しさに誇りを売ったチャイニーズですぜ？ こんなゴキブリ女殺しましょうよー」最悪の形容詞だった、

私の友達をそんな風に言つなんて、でも、文句を言つたら私も殺される、そういう気分でいっぱい、口に出そうにも出せず、涙だけが出てくる。

「我々の目的はなんだ？ 言つてみる、チャイナ狩りじゃない筈だが？」紫スーツの男の人はそう、右の男に強く言つたわ、すると、右の男も大人しく銃を下た、少し安心したけど、それでも、また怖かつた。

この男に今、命は握られているから、助けてと叫びたい、でも、周囲には人気が全く無かつた。

スーツの男は私達に一步、また一步と近づく。

「さじとお嬢様、先ほどの部下の無礼を失礼、少し……我々と一緒に港にでも行きませんか？」

男はそう、温和な風に私の目の前で言つ、けど、それに拒否権は無かつた。

逆らつたら殺される、そう、さつきの銃弾で私達は完全に心を死の恐怖に支配されていた。

動くことすら、できなかつた。

「……沈黙は了承、さて、それならこのお嬢様方を連れていくとしようか」そう、紫のスーツの男がそう言つと、私の後ろからがつりと、痛いくらいに誰かが掴む、けど、私は抵抗できなかつた。何も、そう、何も。

流されるままに私達は縛られ、車のトランクに入れられ、そして、エンジンの音が響く。

私とリンとアムは別々の車に乗せられ、闇と肉体の拘束、そして銃の恐怖が体を支配して思うように動けず、震え、そして気づけば私は失禁していた。

この時は恥ずかしい何て事は考えてなかつた、ただ、凄い怖かつた。

港の巨大な倉庫に私は椅子に縛り付けられ、そこに居た。

アムやリンは別の場所に移されたみたいで、それで男たちはテープルに置いた電話で、私の学生証をカバンから取り出し、パパ達に電話をかけ、何かを話していた。

恐らく脅迫なんだろう、身代金をとつて、それで私からお金を巻き上げるつもりなんだ。

倉庫の周囲にはだいたい5mぐらいの鉄の巨人……蒸機鎧が4機、全部が中に入っている事を示すためにカメラアイが赤く光り、装甲は真っ黒に塗装されていて、肩にはXを傾けたようなマークをしてあり、どこの機体かは解らなかつた。

少なくとも、アメリカやイギリスの蒸機鎧には見えない、だけどその機体を観察していて一つの点が見えた。

黒く塗装され帯刀しているのは西洋剣で手に持つのは蒸気エンジンがごでごでについたアメリカ製の45mm砲、でも、背中の羽と胸部のデザインは昔見たジパング制の蒸機鎧と同じだつた。

輸入品？でもジパングとの貿易はまだ本格化していない、かと言つて軍事機密品をホイホイとマフィアに渡す筈もない。

マフィアのリーダー、紫色のスーツの男の顔を、もう一度見る、恐怖と驚きで良くわからなかつたけど、髪の色は黒く、肌はそう、黄色人種だった……

ジパングにはヤクザと言つマフィア集団が居る、それは強大な武力と人員、そして政治的影響力を持ち、いわばジパングの裏の稼業を行つ「闇の政府」と言つべきものだと、ジパングに関する本で見た。

それなら自分の国の蒸機鎧を保有していても何ら問題は無い、そしてリンを撃つた男は、彼女がチャイナの人間だとわかつた……

私達白人にはわからないけど、チャイナの人間とジパングの人間、それと黄色人なら大独逸帝国の人は顔つきが多少違うらしく、それぞの国の黄色人ならすぐにわかると言われている。

変な魔女のような人から、形見のプレートを渡されて、それからヤクザに捕まるなんて、彼女が言つた運命が変わる事つてこの事？

だとすればもっと実用的な護身道具を買ってればよかつた、そう、私はひどく後悔して、そして段々とあの恐怖から冷静になってきた事を実感する。

ヤクザの親分の言葉だと、私だけに用があつて、後の2人はおまけみたいな言い方だつた、だとすれば、本命の私には脅しこそれど、殺しはしない、だとすれば話をする事もできる。

「……貴方達……ジパングのヤクザなの？」 単刀直入に、顔をヤクザの親分に向け言つ。

「そうだ、と言つたら？」 肯定、やつぱりヤクザだつた……だけど、彼もその取り巻きも銃を向けなかつた。

それが私にとっての死の恐怖拭い去り、安全だという確証を作り

出す。

「何でこんな事をするの?ジパングとアメリカは影で同盟を組んでいるじゃない」

「我々は国の意思で動いてる訳では無いからな、国の同盟など無意味だ、それに君の父、彼は私達のために必要なのだよ、だから君を使いここまで呼んでいるのではないか」

パパを呼ぶための人質、目的はパパの体、そして、このヤクザ達はジパングの人間だけど、政府の人間ではないから国交問題も何も無い……

でも無茶苦茶よ、そんな事をしてもパパはすぐに裏切って脱走する、だつてパパは英雄だから、一人で戦場の真ん中に立ち、何十機の南軍の蒸機鎧を破壊した存在だから極東の島国だつて私達を連れて逃げられるに決まっているわ。

「君はそんな事をやつても無駄だと言いたげのようだが……まあそれはそれでいい、脳だけでも残つていれば、我ら逆元党の研究者により有力な力となりえるのだよ」

「ぎやく……元団?」聞いたこともない名前だった、それがヤクザ達の組織の名前だとすると、頭が痛くなる。

「おつと、それ以上の情報は君は知る必要はない、とだけ言つておこう」「うう、ヤクザの親分は三流悪役のようにペラペラ話そうとしない、うう、ちょっと気になる。」

けどこのヤクザはジパングの工作員でなくてもジパングの蒸機鎧を

購入できるだけのバックを持ち、そしてパパの体を狙つている……
そうなつたらパパも危ないかもしれない、大丈夫だけ……多分。

とつあえず死に至る事はまだないといつのは自覚したけど、気に入る事があつた。

「……それで、リンとアムは無事なの？」そう、私のクラスメート2人だ、あの2人に何かあつたら、私だつて暴れてやる、そう胸の中で決意する。

「ああ、彼女達か、そうだな……まあ、殺さないのなら好きにしろ、そいつ言つたさ」

最悪の答えが出た、リンやアムが何をしたと言つの？

「我ら逆元党の顔や名が出るのは危険だからアジトに送らせてもらつたよ、勿論、君も父親が要求を拒否すれば、同じ目に遭つが……」
そつ、男は薄ら笑みを浮かべて言つ。

凄い怒りの湧く顔だつた。私の中の恐怖はすっかり失せて、色々と言いたくなる。

「つ……あの子達が何をやつたって言つの！ねえ！解放しなさいよ！彼女達は何も知らないのよ！」感情をありつたけぶつける、ヤクザのボスがめんどうくさそうな顔をする、本当に苦い虫を噛んだような、黙らせたいけど黙らせないと言つた顔だ。

「あたしには縛るだけしかできない癖に！いい加減にしなさいよ
ンタ達！ねえ聞いてるの！」

どんどんと私は怒りを吐き出す。

「撃ちたきや撃ちなさい！でもね！パパはきっと……うつん……私もアンタなんかに屈しないから！」

> MAOS 無頬機構 ver10.1 起動 <

そう、視界の中心に良くわからない言語がいきなり浮かびだした。

> アキシオン計測中、発動者体内アキシオン量20、大気中含有アキシオン量・低 <

> 身体情報表示、動体レーダー、温度計、以下の常駐術式を起動 <

どんどんと、視界の隅に良くわからない文字が浮かび上がってくる。

人体の形の図形、丸い図形、アラビア数字の温度計、視界に様々なものが浮かび上がってくる。

頭の中に良くわからない情報がドンドンと入って来て、それにより力がみなぎってきた感覚を覚える。

抜け出したい、この拘束を解きたい。

> コーザーの要望により、肉体強化、強化出力・5倍で発動します <

そう考えたら、ロープが千切れた。

「……っ！妖術を使つただと！？」ヤクザの一人が叫び、銃を構えようと腕を動かす。

>肉体自動制御術式、起動します <

すると彼が銃を構えたのと同時に、私の体は勝手に体を傾ける。

引き金は引かれ、拳銃から弾が飛ぶ、けど、それは私に当たらなかった。

私は椅子を持ち上げ、銃を構えた男に投げ飛ばす。

「があつー！」男は椅子が突き刺さり、そして胴体から上と下が解れる形になる。

>コーナーの心理的ショックを計測……活動不能になると判断、精神安定術式を起動します <

普通なら叫んでいるぐらいの大惨事だけど、あまり怖くはなかつた。

それに怖気づいたヤクザは、さつきまで私に怯えていたのと同じ様子で、蒸機鎧の後ろに隠れた。

だけどヤクザのボスだけは怖気づく事など無く、私を見据えていた。

「魔道制御術式を生身で発動させたか、詠唱も無く発動するとは……妖術師の資質があつたと言つ事か？」

何を言つてゐるのか解らない、だけど、今の私なら勝てる。そう考え、彼に私は一寸散に飛びかかった。

だけどヤクザの親玉は私がどびかかるとアイキドーの動きで、私の攻撃を受け流し、投げ飛ばした。

だけど私も体が勝手に動き、受け身をとつてダメージを軽減し、また、飛びかった、力ませのタックル、アイキドーをやつ trebuieわかるけど、圧倒的な力があれば、アイキドーの技なんて結局は流しきれないのだ。

タックルはヤクザの親分に思いつきり当たり、壁まで吹き飛び、そしてマウントポジションを取つた。

今なら一方的に殴れる、アムとリンの痛みを思い知らせられる、そく、勝利を確信したんだけど……

アキシオンの枯渇により、各種術式を緊急終了させますへ

殴りかかるとした瞬間、体の力が抜けた。

非力なパンチが、ヤクザの親玉に当たつた。

「え？」さつきまであつた力が無くなり、驚く、するとヤクザの親玉はその隙に強引に立ち上がり、私のマウントポジションを解除し、そして私のおなかに思いつきり蹴りを入れた。

「あがつー」息が出来ず、酷い痛みに襲われ、私はお腹をかかえうずくまる。

「ボス、大丈夫で？」

「魔力切れか……しかしどんな制御機を使つたんだ……まあいい、また暴れられたら困る……彼女を押さえつけている」そうヤクザの構成員何名かが私に近寄ってきて、腕を抑える。必死に手足を動かそうとするけど、痛みで体が動かない。

そしてヤクザの親分は、構成員から長い曲刀……カタナを受け取り、引き抜いた。

「ヤクザというものは責任と義務により構成されている、それは逆元党の人間も同じだ……そして今、お嬢さんはうちの組員の命を奪つた、どういう意味か解つているな？」その声は淡々としていたけど、怒り狂っているのは行動で分かつた。

「……嘘、よね……私を殺したら、パパが怒つて殺しに来るわよ?」

「腕一本と脚一本切るだけだ」冷淡な、だけど恐ろしい答えだった。

どうしよう、不安感と、くやしさで一杯に私の心はなる、死にたくない、怖い、でも、さつきみたいな力は出せない。

ヤクザの親分は刀を振りかぶり、そして

ドンヒ、倉庫の外から爆音が鳴った。

「な、何だ!？」ヤクザの親分は剣を振り下ろすのをやめ、そして周囲を確認する。

私にはどういう状況か解らなかつたが、次の瞬間、今度は巨大な鉄塊が近くに落ちた音と、同時に強い衝撃が周囲を襲つた。

「なっ！」強く地面が揺れ、ヤクザ達が私を押さえつける力が弱ま

る、チャンスだつた、私は必死に彼らの拘束を振りほどき、立ち上がり、そして鉄塊が落ちた音の方を見る。

そこに立っていたのは黄金色の蒸機鎧だった、まるで鳥のような羽を持ち、胸部には大砲がついている。

様々な煌びやかな装飾が施され、腕にはリボルバー式の120mm砲を持つ巨人。

天井は貫かれ、また、背部の機構が何らかの目的で使われたのか蒸気を噴出していた事から、私はその機体が空中飛行が可能な、真作鎧だと判断した。

それはまさに黄金の騎士であり、見るものを恐怖する力そのものに私は感じた。

「な、なんだアレは……」近くに居た、ヤクザの構成員がわなわなと怯えた様子で、その黄金の蒸機鎧を見ていた。

視線は私ではなく、彼らに向いている……チャンスと見た私は、一目散に走り、倉庫のコンテナの陰に隠れた。

追つてくる人間は居なかつた。

コンテナの陰から私は顔を出す、黄金の蒸機鎧はヤクザの親分が居た所に銃を向けていた。

「……何が目的だ」親分はそう、蒸氣鎧に強気の態度で出る、既にヤクザの蒸機鎧も手に持つた45mmオートマチックカノンを黄金の蒸機鎧に向けていた。

黄金の蒸機鎧からの返答はない、沈黙を続けていた。

一触即発の間が、空間を支配する。

静寂、誰もが言葉を紡がなかつた。

一瞬で勝負は決まり、生きるものと死ぬ者に別れる時間。

何秒か何分か解らない時間が経ち、そして……先に動いたのは黄金の蒸機鎧だった。

黄金の騎士は巨大なリボルバー銃……120mm砲を黒い騎士達に向け、そして引き金を引いた次の瞬間には銃を持つていない方の手でまるで扇を回すかのように撃鉄を上げて弾倉を回転固定させるとによつて、引き金を一瞬のうちに何発も引いた。

引き金を引く度に別の敵に瞬く間に狙いをつけ、撃ち抜く。

ファニング、私のパパが蒸機鎧でやつていた事があるけど、リボルバー式の120mm砲や人間の持つリボルバー銃で高速連射を可能にする技法。

荒野のガンマンが産みだした技で、反面狙いをつけ、的確に撃つ事は困難であり、また蒸機鎧の操作法では更に腕部の制御が困難な為、これを使えるのは北軍でも私のパパとあと3人、そして南軍でも2人おり、それらは全て後世にて伝説とも言えるほどの戦績を残したパイロットだと言われている。

その技により自らを包围していた黒の蒸機鎧は、瞬く間に、そして

全て胸部の「ツクピットを貫かれた。

少し間を置き、黒の蒸機鎧達は体制を保てず、崩れ落ちる。

一瞬の動きで、相手が反応する間も無く勝利していた。

黒い鉄のサムライたちは、荒野のガンマンの技の前に敗北したのだ。

「ファンシングだと！？貴様……CIAか！？それとも……ジョン・ホリディか！」ヤクザの親分が叫ぶ、乱入者の手により絶対的優勢は崩壊した、それも完璧な形でだ、だが、動搖することはあれど、恐怖により発狂する事は無かつたのが私には強く印象に残った。

「……どちらでもねえ、ただの亡靈だよ」黄金の蒸機鎧の拡声器からの中、それは荒っぽい男の声だった、少しイメージとは違つたけど、ワイルドで、それで生命力に溢れる声だった。

「南軍の者か！？まさか……」の作戦を見透かして！？」

「つむせえ、陰謀！」こなら自分の国でやつてろ「すぐに黄金の蒸機鎧は、銃をヤクザの親分に向け、引き金を引いた。

爆音、瓦礫が飛びそうな気がしたから、私はコンテナの陰にすぐに隠れた。

「ひいつ……に、逃げるぞ！逃げる！逃げるんだ！」

「お、親方……！」

「良いいから生きてアジトに戻るぞ！戻つて体制を立て直すんだ！」

そう、何名かの男の声が聞こえた、けどその次の瞬間には爆音が起き、その爆音は何回か続いた。

それは逃げたヤクザの掃討に使われた弾だと、すぐにコンテナの方にまで肉片が飛んできた所から解つた。

「つたく……どうしてこんな黄色人種なんて来たのやら……さて、と、もう大丈夫だぞ、出でこい」私への声だった、彼は私を助けに来たみたいだけど……何が目的かは、見当がつかなかつた、でも、こうして倉庫の隅にうずくまつても何もならないから、周囲を確認すると私は隠れていたコンテナから黄金の蒸機鎧の居る場所に戻つた。

「……助けてくれたの？」

「ああ、親父さんには借りがあるからな」そう、蒸機鎧の男は言い、次の瞬間、蒸機鎧の胸のハッチが開く。

そこに居たのは、私を尾行していた、あの中年男性だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4877ba/>

ゴールドラッシュ & ゴールデンエイジ

2012年1月14日22時57分発行